文化 | Culture |

月、水、金、土曜日 掲載

マスクとミサイル ■上

寄稿 辺見庸

新型コロナウイルスの感染が地球上に広がっている。この災禍は人類にとって何を意味するのか。作家で詩人の辺見庸さんに寄稿してもらった。

世界の「底」が抜け落ちた

マスクとミサイルは論なく別物である。一方はふつう平たくて柔らかく、毫も悪意を感じさせない、ことさらに造形と言うも疎かな消費財。他方は宙にむかい尖形に屹立する、底意の計り知れない、複雑にして精密な破壊兵器である。両者を並べて論じることはできないかもしれない。たしかに前者で戦争は戦えず、後者でウイルス感染を防ぐことはできない。

一基のミサイルは一枚のマスクに比べ気が遠くなるほど高価であり、少なからぬ人びとを畏怖させ憑依させるほどの神秘性さえそなえてきた。その残虐な破壊性にもかかわらず、いや、だからこそであろう、ミサイルは強力であればあるほど〝ファルス〟のごとき信仰の対象でありえたのである。マスクは防御的で軟弱な表象としていとも気楽に使い捨てられてきたのだ。

畢竟は、ミサイルを圧倒的な上位に、マスクを下位のものとみなす価値の順位を、わたしたちは無意識に受けいれてきたのである。言いかえれば、人類は兵器開発には血道を上げてきたが、マスクなど歯牙にもかけてこなかった。果たしてそれでよかったのか？

空前

新型コロナウイルスによる予期せざる災殃は、これまでまったく疑いもしなかった概念の一切を土台から揺さぶっている。「土台から」と書いたが、しかし、自問を禁じることができない。世界にそもそも「土台」などというものがあっただろうか。

おそらくこの世界はいま、空前絶後の、歴史を画する変容のさなかにある。世界像を世界自身がもつすごい力で変えつつあるとも言える。そのダイナミズムに比肩する歴史は、ごくごく短期的にみても、第2次世界大戦の勃発と原爆投下、戦争の終結まで遡らなくてはならないのかもしれない。そのときも「土台」が問題にされた。マルティン・ハイデガー（1889～1976年）の言葉で表せば「根底」である。

米ニューヨーク中心部の繁華街タイムズスクエアでマスクを着けた人＝3月12日（AP＝共同）

コロナ禍 絶望的併存に警告

「世界にとっては基礎づけるものとしての根底が見出されなくなっている」（「乏しき時代の詩人」）。ハイデガーがいささかならぬ悲嘆とともに述べたのは、大戦後間もない1945年12月であった。ナチスに加担したハイデガーにとって、ドイツの惨憺たる敗北は自らの哲学の挫折でもあり、「神性の輝きが世界史から消えてしまったのである」とまで述懐したのも故なしとしない。

気になるのは「基礎づけるものとしての根底」である。ハイデガーの論述と言葉の数々は、ナチス・ドイツの盛衰ときりはなしても、遠い残響として、歴史の暗がりをうねくりながら今日まで這いわたってきている。が、疑問が黒雲のように湧いては消える。世界を「基礎づけるものとしての根底」は、ひょっとしたら大戦終結当時より、新型コロナ禍のいまのほうがゴソッとなくなってしまっているのではないか。世界の「底」が抜け落ちてしまってはいないだろうか。

反撃

そのような根底なき世界を、哲学者は「世界の夜の時代」と名づけた。同時に「乏しき時代」と呼ぶとともに、それらが「ますます乏しさを加えてゆく」と言いつのったのだった。「世界の夜の時代」が今日のパンデミックを指すものではないにせよ、なにか預言的警きを感ぜざるをえない。やや牽強付会の説をなせば、マスクよりも核ミサイルに〝神性〟をみてきた現代は、ここにきてこの世を存外に「乏しき時代」とうっすら気づきつつあるのかも知れない。

いや、それは楽観的にすぎるだろう。少なくもトランプ米大統領は現在の「乏しさ」を自覚してはいない。マスク不足に悩み、各州の市民に感染拡大防止のための外出規制を課し、国家非常事態まで宣言している米国は、突如、極超音速滑空体（ミサイル）C―HGBの飛行実験を敢行、マスクよりミサイル重視の姿勢にまったく変わりがないことを鮮明にしているのだから。

にしても、かつていったい誰が予感し反省しえただろうか。核爆弾の過剰とマスクの過少―それらが絶望的に併存する風景を！ 象徴的に言えば、新型コロナ禍はそこに生じた断裂の暗がりに音もなくしのびこんできた歴史の警告でもあった。このたびの災厄は深刻な病理とさしせまった疫学上の問題であると同時に、テクノロジー万能を信仰してきた世界とそれを支えてきた人類への「壮大な反撃」―という面もあるのではなかろうか。

＝次回は8日付文化面掲載予定

へんみ・よう 1944年宮城県生まれ。共同通信社で北京特派員、ハノイ支局長などを歴任し、日本新聞協会賞を受賞。「自動起床装置」で芥川賞、「もの食う人びと」で講談社ノンフィクション賞、「眼の海」で高見順賞、「増補版1★9★3★7」で城山三郎賞。他に「赤い橋の下のぬるい水」「青い花」「純粋な幸福」など著書多数。

「21世紀の資本」映画化

2013年にフランスで刊行、翌年の邦訳も話題を呼んだ経済学者トマ・ピケティさ

「21世紀の資本」の公開。東京を皮切りに全国を巡回中だ。

1％の貴族に富が集中し、貴族以外は学校にも病院にも行けず働き口もなく、平均寿命は17歳だったという18世紀の欧州。21世紀の現代におい

ミゼラブル」「怒りの葡萄」「ウォール街」など、貧富の差や不平等が表現された古今の映画の映像を挟み、音楽に乗せ、100分ほどの軽快な映像作品にまとめた。

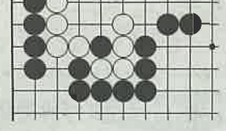
本の邦訳に続き、映画の字幕も手掛けたのは山形浩生さ

」と、写真のほかイ
ョンや映像で構成した
日大輔展「Room. Pt.

館賞決まる　第35回詩
日本現代詩歌文学館振
）が発表され、詩部門
さん(45)の「どうぶつ
の人）に、短歌部門は
ん(72)の「鳥影」（角
団）に、俳句部門は鍵
(88)の「火は禱り」(同)

免状への最短コース

○囲碁

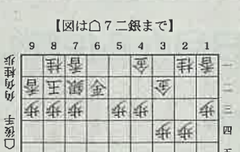


【黒番】初手がポイントです。眼形の急所をしっかり見抜いてください。

最初の一手だけ答えてください。

□将棋

【図は△7二銀まで】



【先手番】後手玉を寄せ切るには。

（ア）▲6一銀
（イ）▲6三銀

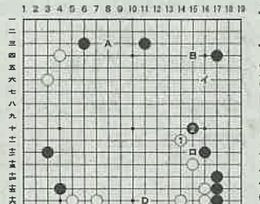
【応募要領】往復はがきで往信、返信とも出数、解答、住所、氏名を記入▼解答は1人1通日消印有効▼あて先・問い合わせ《囲碁》〒1―0076東京都千代田区五番町7の2日本棋日認定係☎03（3288）8726《将棋》51―8516東京都渋谷区千駄ケ谷2の39の本将棋連盟熊日認定係☎03（3408）61

解答　第12回分

囲碁

【正解】C（白1）　10点

白1が双方の模様の接点で、逃ぬ天王山です。黒2の受けなら白Bのカカリにます。すぐに白Bとカカるのは黒イの受けから



を取られ、のオシに回ます。白Aはり黒ロとれます。白囲うだけのです。

B8点、D4点、

将棋

【正解】イ▲5五馬　100点

イ▲5五馬が冷静な一手です。以下、△2八香成▲同馬△同桂成▲同玉と、後手の攻め駒を一掃して先手玉が安全になり、後手玉は不安定な形で先手優勢です。

ア▲8五桂は△8四玉▲5五馬△8五玉▲8△9六玉と進み、後手玉が捕まらず、先手不利で

ウ▲7